

名古屋市天白区および千種区における アカギツネ *Vulpes vulpes* のロードキル

曾根 啓子

なごや生物多様性センター 〒464-0066 名古屋市天白区元八事五丁目230番地

Road-killed cases of red fox *Vulpes vulpes* from Tempaku-ku and Chikusa-ku, Nagoya city, central Japan

Keiko SONE

Nagoya Biodiversity Center, 230 Motoyagoto 5-chome, Tempaku-ku, Nagoya, Aichi 468-0066, Japan

Correspondence:

Keiko SONE E-mail: sonekei@hotmail.co.jp

要旨

2024年6月上旬に名古屋市の天白区および千種区でアカギツネ *Vulpes vulpes* のロードキルが各1件発生した。これらの個体を回収し、外部形態計測および剖検を実施した。天白区の個体（個体番号：24060601）は雌の成獣で、育児中の経産個体であった。千種区の個体（個体番号：24060801）は生後2か月程の雄の幼獣であった。また、これらの個体の消化管内容物を観察した結果、ペットフードや生ゴミといった人家等から発生したものを採餌していたことが明らかとなった。

はじめに

アカギツネ *Vulpes vulpes* は食肉目イヌ科に属する中型哺乳類で、日本を含む北半球の大部分に生息している。環境に対する順応性が高く、近年は世界各地で人間の生活圏である都市域にまで生息するようになっていく（浦口, 2018）。都市域に定着した個体は「都市ギツネ」とよばれ、日本では北海道札幌市でその存在が確認されている（浦口, 2018）。一方、名古屋市においては、かつては郊外を中心に広く生息していたものの、都市化の進展に伴って生息の記録が著しく減少し、2000年代に入る頃には守山区の北東部に記録が限定されるようになった（名和, 2008）。ところが近年になって、郊外のみならず、市街地や市街地に囲まれた緑地などにおいても生体の目撃情報や死亡個体の発見がなされるようになってきたことから（野呂, 2015; 曾根ほか, 2020）、いったんは衰退したアカギツネの生息が拡大傾向に転じているものと推察される。野生動物が市街地に進出した際に避

けられない現象が、動物が車両と接触して死亡するロードキルである。札幌市の例では、都市ギツネの個体数の増加に伴って、ロードキルの発生件数が増加することが報告されている（浦口, 2018）。幸いなことに、名古屋市においては、一部の事例（小野・野呂, 2017）を除き、これまでアカギツネのロードキルが話題となることはほとんどなかった。しかしながら、2024年の6月上旬、天白区および千種区において、立て続けに2件のロードキルが発生した（図1）。本事例は、市内におけるアカギツネのロードキルの発生を示す貴重な記録となると考えられるため、発生から個体回収までの経緯をここに報告する。さらに、回収個体について、食性分析を含む剖検を実施したため、その結果についても併せて報告する。

ロードキルの発生・個体の回収

1件目は、2024年6月6日に天白区中平3丁目の国道302号線の本線内で発生した。午前8時頃に「本線内で



図1. アカギツネのロードキル発生場所および千種区の発生現場写真（撮影：藤谷武史氏）。左図中の1は1件目（天白区中平3丁目）、2は2件目（千種区天白町大字植田植田山）のロードキル発生場所をそれぞれ示している。なお、左図中の網掛け部分は緑地を示している。

弊獣の存在を確認したため、回収して欲しい」という警察署からの要請を受けた天白環境事業所の職員が現地に赴き、個体の回収を行った。同事業所からの連絡を受け、なごや生物多様性センター（以下、センター）の職員（著者）が回収個体を確認したところ、アカギツネであることが判明したため、発見日時や場所に関する聞き取りを行うとともに、個体をセンターに引き取って剖検まで冷凍庫で保管した。2件目は、2024年6月8日に千種区天白町大字植田植田山にある東山公園線の曙橋上で発生した。午前6時半頃に路上で1頭のアカギツネが死亡しているのが発見され（図1）、発見者からの連絡を受けたセンター職員（著者）が同日内に回収に赴き、同様に冷凍保管した。

外部形態計測・剖検

回収したアカギツネについて、外部形態計測および剖検を実施した。各個体の外部形態計測値を表1に示した。天白区の個体（個体番号：24060601）は雌の成獣で、外

見上は目立った外傷は認められなかったが、後の骨格標本作製時に、寛骨に著しい損傷が認められたことから、車両と接触して腰部を強打したことが死因であると推察された。この個体は、乳頭が突出し、子宮には4個の胎盤痕が認められたことから、経産後間もない個体であると考えられた。一方、千種区の個体（個体番号：24060801）は雄の幼獣で、頭骨の粉碎骨折が認められたことから、車両と接触して頭部を強打したことが死因であると推察された。この個体は、黄味がかった褐色の毛

表1. アカギツネの外部形態計測値。

項目	天白区の個体	千種区の個体
個体番号	24060601	24060801
性別	♀	♂
体重 (g)	5430	2620
頭胴長 (mm)	668	499
尾長 (mm)	374	242
後足長 (mm)	153	132
耳長 (mm)	73.2	65.1

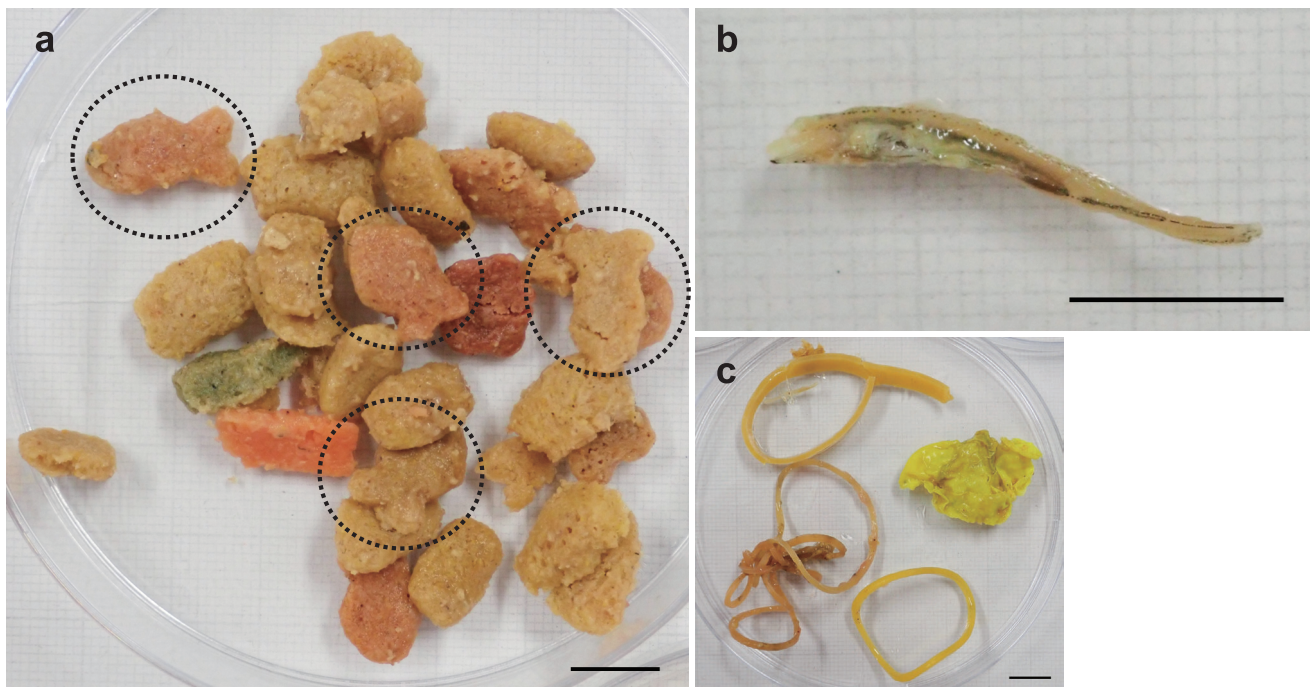


図2. 天白区のアカギツネ（個体番号：24060601）の消化管内容物に認められたキャットフード（a）、煮干し（b）ならびに輪ゴム・ゴム風船（c）（スケールバー：1 cm）。

色を呈していたことや後足長の値（Sargeant, 1981）から、生後2か月程と推定された。

剖検時に各個体の消化管（胃から直腸）を摘出し、その内容物を1 mmメッシュの金属フルイで水洗選別し、肉眼で観察した。天白区の個体では、ペレット状のペットフードおよび煮干しといった人工食品、ビニール風船および輪ゴムといった人工物が認められた（図2）。なお、ペットフードは魚類の形状をしたペレットを含んでいたことから（図2a）、イエネコ用のもの（キャットフード）であると考えられた。一方、千種区の個体では、精肉と見られる生肉および野菜（キャベツ、ネギ類、ニンジン、豆類）といった人工食品、プラスチック片といった人工物が認められた（図3）。観察した消化管内容物は液浸標本とし、センターにて保管した。また剖検後、毛皮標本（仮剥製標本）および骨格標本を作製し、同様に保管を行った。

考察

ロードキル発生の経緯

1件目のロードキルの発生現場となった国道302号線

は、「名古屋環状2号線」とよばれる外環道路で、名古屋市の周辺部を取り囲むように走る交通量の多い幹線道路である。本線の周囲には高さ5 m程の遮音壁が設置されているため、アカギツネのような中型哺乳類が本線内へ侵入するのは容易ではない印象がある。しかしながら、交差点や側道からの車両合流地点では遮音壁が途切れているため、そういった場所から本線内に侵入することは可能であり、今回もそのようなケースであると考えられた。発生現場の周囲には、住宅地や商業施設などが密集している一方で、直線距離で1 km以内の場所には天白公園や荒池緑地などの大型の緑地が存在している。こうした緑地はアカギツネの生息にとって有利な環境であると考えられ、実際に生体の目撃や、死亡個体の発見例がある（曾根, 未発表）。また、今回発見された個体は、乳頭の発達が顕著な経産雌であったことから、この付近で出産を行ったばかりの母ギツネであり、夜間に巣穴を出て採餌に出かけた際、ロードキルに遭遇したものと推察された。

2件目のロードキルの発生現場となった東山公園線は、東山動植物園の南側の外周を走る起伏に富んだ道路で、

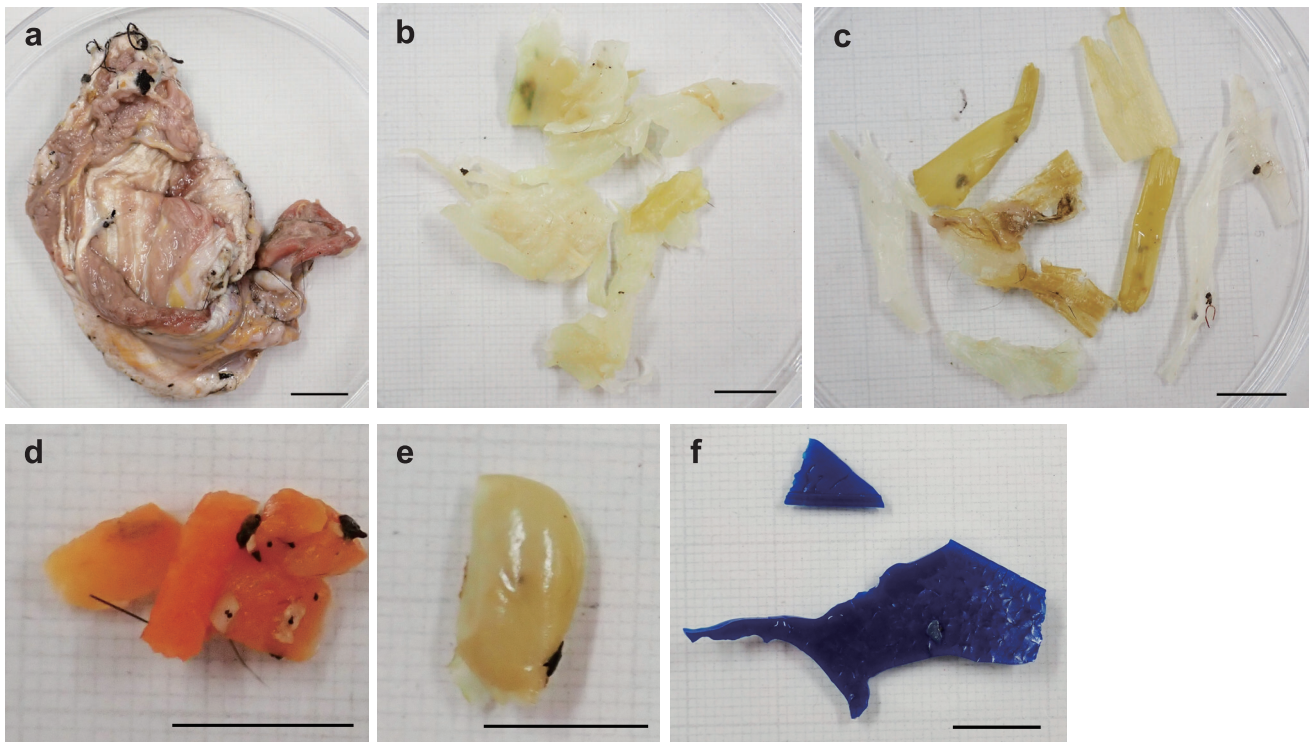


図3. 千種区のアカギツネ（個体番号：24060801）の消化管内容物に認められた生肉（a）、キャベツ（b）、ネギ類（c）、ニンジン（d）、豆類（e）ならびにプラスチック片（f）（スケールバー：1 cm）。

1件目の国道302号線とは異なり交通量は疎らである。発見場所となった曙橋は、植田山（標高90 mの低山）の一角に位置している。植田山の一带には住宅街に囲まれた里山環境が広がっており、1件目の発生現場よりもアカギツネの生息にとって好適な環境であると考えられる。また、今回発見された個体は、生後2か程の幼獣であったことから、この春に出生したばかりの当歳の仔ギツネであると考えられた。仔ギツネが独り立ちするのは生後約6カ月であること（浦口，2018）を考慮すれば、今回の仔ギツネは母ギツネとともに行動していた可能性が高く、夜間に親子で採餌に出かけて巣穴に戻る際、経験の浅い仔ギツネのみがロードキルに遭遇したものと推察された。

アカギツネの食性

アカギツネは好機主義的な雑食性で、小型哺乳類や昆虫類、果実類などが主な餌になっているとされている（浦口，2018）。しかしながら、今回の2頭からは、これらの餌品目は検出されず、人工食品のみが検出された。

天白区の個体では、キャットフードおよび煮干しが検出されたが、これらは飼ネコあるいは地域ネコの餌として人家等の周辺に置かれていたものを、アカギツネが掠め取るようにして採餌したのではないかと推察された。また、千種区の個体では、生肉と野菜が検出されたが、これらは人家等から排出された生ゴミに由来するものと考えられた。したがって、今回、ロードキルに遭遇した個体は、いずれもペットフードや生ゴミといった人家等から発生したものを採餌していたことが明らかとなった。アカギツネの食性は、人為的環境に近くなるほど、人為的な餌品目への偏りが大きくなることが報告されており（三沢，1979）、今回の2頭における観察結果は、まさにこれと一致するものであった。今回の事例と同様に、胃内容物に生ゴミが検出された例は、市内のタヌキ *Nyctereutes procyonoides* やハクビシン *Paguma larvata* でも報告されている（曾根，2022；2023）。これらの動物では、生活圏が人間の生活環境と重複することが多く、既にその食性が人為的な餌品目に依存するスタイルへと変化しているものと考えられる。一方、市内のアカギツ

ネにおいて、これと同程度の変化が生じているかどうかは、今回報告した2事例のみで判断するには尚早であり、より一層の情報収集の強化が望まれる。したがって、今後、ロードキル等で死亡個体が生じた場合には、可能な限り個体を回収し、分析・標本化して記録を残していく必要があると考えられた。

謝辞

名古屋市環境局天白環境事業所には天白区の死亡個体の回収・提供を、田中理映子氏・藤谷武史氏には千種区の個体の拾得および現場写真の提供をしていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

引用文献

名和 明. 2008. 食肉目 イヌ科 キツネ. 新修名古屋市史資料編編集委員会（編）. 新修名古屋市史資料編自然目録, pp. 77-78. 名古屋市, 名古屋.

野呂達哉. 2015. アカギツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus). 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課（編）. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや2015－動物編－, pp. 40. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋.

三沢栄一. 1979. 生息環境の相違によるキタキツネ *Vulpes vulpes schrenicki* KISHIDA の食性の変化について. 哺乳動物学雑誌, 7: 311-320.

小野知洋・野呂達哉. 2017. 名古屋市東部丘陵地域におけるアカギツネ *Vulpes vulpes* の分布拡大と東名高速道路を横切る人工構造物の利用. なごやの生物多様性, 4: 59-69.

Sargeant, A. B. 1981. Determination of age and whelping dates of live red fox pups. Journal of Wildlife Management, 45 (3) : 760-765.

曾根啓子・野呂達哉. 2022. 名古屋市熱田区におけるハクビシン (*Paguma larvata*) の胃内容物の一例. なごやの生物多様性, 9: 103-105.

曾根啓子. 2023. 分析試料としての標本の価値－哺乳類標本を例に－. 生きものシンフォニー, 40号. なごや生物多様性センター.

曾根啓子・西村祐輝・野呂達哉. 2020. 名古屋市内で疥癬症によって死亡したと思われるアカギツネ. なごやの生物多様性, 7: 89-92.

浦口宏二. 2018. キツネ 広域分布種. 増田隆一（編）. 日本の食肉類－生態系の頂点に立つ哺乳類, pp. 67-88. 東京大学出版会, 東京.